

データ利活用のための データマネジメント技法の研究（クラス 2）

アブストラクト

1. 研究の背景/課題/問題認識

今日、データは、ヒト、モノ、カネに続く第四の経営資源として、様々な意思決定、戦略立案、組織マネジメントへの利活用が期待されている。しかし、日本においてデータを利活用してビジネス目標を達成できている企業はほんの一握りであり、必要性を認識していながらも利活用が進まない原因は様々と考えられる。データ利活用に対する要求の多角化・高度化や、データの量と種類の増加、更には、データ利活用のための組織体制整備や人材育成等、データを経営資源として活用するにあたり企業が抱える課題は決して一辺倒ではなく、解消に向けて多角的なアプローチが求められている。

2. 研究アプローチ

当分科会では、メンバーの所属企業が抱える課題のうち、「経営者やデータ利活用者が想定した結果が出ない、成果に対するギャップがある事」、「業務要件検討の段階で、利用するデータを特定し、データ品質のアセスメントができていない事」の解消が、データを利活用してビジネス目標を達成するための鍵になると考え、期待通りの成果を出すためのサイクルとして「ODA(Optimized Data management Acceleration)メソドロジー」の確立を試みた。また、メソドロジーの実行に必要な情報やプロセスをまとめた「データ利活用整理シート」を作成した。「ODA メソドロジー」と「データ利活用整理シート」の有用性と実用性については、オープンデータを活用したメソドロジーのプロセス・手順検証、DAMA (Data Management Association) 日本支部と意見交換の実施、メンバーの所属企業各社におけるインスペクションおよびアンケートの3パターンで検証を実施した。

3. 研究成果

オープンデータを使用したウォークスルーによる自己評価およびディスカッションやインスペクションによる第三者評価の結果、「データマネジメントの成果に対するギャップ」および「利用するデータのアセスメントに関する課題」について「ODA メソドロジー」を用いてデータ利活用のサイクルを回すことで成果およびプロセスに一定の改善が確認され、有用性と実用性について評価を得られた。

4. 評価/提言

「ODA メソドロジー」を活用し、まず課題となるギャップを埋めることでデータを経営資源として効果的に活用し、現在のビジネス目標を達成することが可能となる。さらに世の中の大きな変化に対応するため一歩先の未来を予測するには、データを常に最新の状態にアップデートすることが求められるが、「ODA メソドロジー」は、経営層の要求とそこから洗い出される情報要求を素早く正確にキャッチアップすることでデータ品質へのアプローチにも寄与できると考える。

当分科会で確立したメソドロジーがデータを利活用してビジネス目標を達成するためのデータマネジメント技法の先駆けとなることを望む。